

NGOの現状

—カンボジアの遺跡修復と法学教育にかかわって—

酒 井 幸

弁護士・アンコール遺跡国際調査団副団長

○司会 酒井幸さんにおいでいただいて、「NGOの現状」というテーマで、「カンボジアの遺跡修復と法学教育にかかわって」というお話をいただきます。酒井さんは弁護士ですから、法律が専門ですが、きょうはそれよりも、むしろしなやかな感性といいましようか、あるいは意欲といいましようか、そういったようなことを、あなたの方にアピールして頂こうと思っています。法学部らしい講演の内容かどうか、これは聞いてからの楽しみです。

簡単に酒井さんの御紹介申し上げますが、1970年に司法試験に合格なさって、翌年早稲田大学を卒業し、司法修習生になっておられます。東京弁護士会に所属して、現在、酒井幸法律事務所を主催していらっしゃる。

同時に、お若いころからカンボジアに興味を抱かれて、アンコール遺跡救済委員会の委員や監事、上智大学を中心としたアンコール遺跡国際調査団の副団長さんでいらっしゃるということでもあります。

こういう活動が続ける中で、カンボジアと縁の深いフランスにも2、3年留学なさったりして、遺跡あるいは法律だけでなく、ヨーロッパにも興味と関心をお持ちの方であります。ではよろしく願います。

○酒井氏

皆さんこんにちは、酒井でございます。

学年末試験直前の今日、私の話を聞きに来てくださってありがとうございます。今御紹介いただいたように、私は弁護士をしております、民事事件や刑事事件を手がけているわけですが、それ以外に、いろいろなことにかかわってきています。そういうことの中から私が学んできたこと、感じてきたことを、若い皆さんに少しでもお伝えしたいと思っています。

1 はじめに

去年の9月のニューヨークでのテロ事件以来、テレビも新聞も、アフガニスタンの問題を毎日のように報道していますね。皆さんの年齢を考えると、国際問題で、どこかで戦争らしきものが起こったとか、人が死んだとか、たくさんの方が殺されたとか、そういう非常にホットなニュースが毎日ながされるような事態に接したのは、このアフガンの問題が多分初めてではないかと思うのです。

ところが今から10年以上さかのぼると、カンボジアでもそういうことがありました。その隣の国のベトナムでも戦争がありました。私や、学部長の鈴木先生が皆さんぐらいの年齢のころは、ベトナム戦争のまっただ中でした。カンボジアの内戦は、今からちょうど10年ぐらい前和平が実現する目処が立ち、当時毎日のように日本のマスコミをにぎわせました。皆さんは小学校の高学年ぐらいだったでしょうから、記憶はないのではないかと思うのですが、カンボジアの内戦を終結させ、新政府を樹立するための国連の平和維持活動に、初めて自衛隊を派遣するかどうかということで、当時、日本中、賛成するか反対するかと悩みました。反対もありましたが、結局自衛隊は派遣されることになり、国連の活動の一端を担ったわけです。振り返ってみると、日本のカンボジアに対する関心の高さは、カンボジアという国そのものに対する関心というよりは、派遣する自衛

隊問題に対する関心の方が高かったようで、私は「国内問題」としての注目にしか過ぎなかったように思っています。

今日このテーマは「カンボジアの遺跡の修復と法曹養成にかかわって」というものですが、カンボジアはどういう国か、皆さんご存じですか。アンコール・ワットという遺跡の名前を聞いたことはありますか。たしか1、2カ月前だったと思うのですが、日曜日の「電波少年」という番組で、カンボジアに日本の若い人たちが行って、道路を直し、最後はアンコール・ワットにたどりつこうというような企画を放映していました。なおしても雨が降ればすぐぬかるんでしまい、大変な作業なのですが、暑い中、カンボジアの人たちのために、日本人の青年が頑張る、というような企画でした。見た方はいますか。「やらせ」批判のある番組のようですが、カンボジアの現状の一端はかいま見ることができましたし、また一生懸命必死になって作業をすることで地元の人に喜ばれ、大変感動したような話をしていました。私は、こういう経験の中から感じ取ってくれるものもあるかと思いながら見ておりました。

私自身はここ13年くらいカンボジアにかかわってきました。他国へ出向いて、外国人がその国の大事なことにかかわる場合は、本当に慎重にしなければならない面があります。反面、大胆になる必要がある時もあります。とても難しいところでかかわらせていただいていた中で、学んだことがたくさんあるのです。

2 弁護士が遺跡修復？

そもそも、民事事件や刑事事件をやっている弁護士が、なぜカンボジアの遺跡なのかというところからお話ししたいと思います。弁護士の活動範囲は非常に広いのですけれども、よその国の遺跡の修復にかかわるなどという人はほとんどいません。なぜですかとよく聞かれます。

私は子供のころ、多分小学生のころだと思うのですが、アンコー

ル遺跡の絵か写真かを見て、シンメトリックな美しさに引かれ、心に残りました。大人になったらぜひ行ってみたいと思ったのです。ところがカンボジアでは 20 年に及ぶ内戦が続いて、私が大人になったときには、そのために行くことができないという状態がずっと続いたのです。

1989 年、今から 15 年くらい前の話になりますが、東京の池袋のデパートで、アンコール遺跡の写真展があったのです。まだ内戦のさなかの頃です。上智大学アジア文化研究所に石澤良昭という教授がおられ、この先生は、昔、内戦前の時代に、カンボジア現地で遺跡の研究をしておられた方でした。この先生が、当時のカンボジア政府から招かれて、内戦の中で危機に瀕しているアンコール遺跡を見てほしいという依頼を受けておられたのです。当初はごく数人の、2、3 人の学者を誘い合わせて現地調査に行かれたのだそうです。そして危機に瀕している状態を、世界に、「SOS アンコール」ということで発信しておられたのです。写真展はそのキャンペーンのひとつでした。

私は、内戦の中でアンコールの遺跡はどうなっているのだろうと心配していましたので、写真展に行ってみて、美しい遺跡が少しずつ少しずつ破壊されていく、自然の驚異の中で破壊されていく姿に、非常に驚き、悲しみを感しました。その気持ちをつたえたいと思い、その調査団の先生に手紙を書いたのです。「内戦の中で大変でしょうが、非常に貴重な仕事だと思うので、ぜひ頑張ってください」という手紙です。そうすると、思いもかけないことに返事が来ました。「あなたの手紙を翻訳してカンボジアの文化大臣に届けたいけれども、了承していただけるでしょうか」という内容です。そこから、石澤先生との交流が始まったのです。

そのころ石澤先生は、調査に行く学者の範囲を広げようと、建築学・考古学・美術史・図像学などのほか、新たに地質・土木・植物学など、遺跡の保存修復だけでなく、環境などの専門家も集めて、研究会を始めておられたのです。私は、よかったらどうぞ研究会に

来てくださいと声をかけていただき、その専門家の研究会に参加するようになり、そのうちに、現地への調査団にも参加させていただくようになりました。私のような仕事をしていると、実務は学者の先生より慣れていますが、また社会との直接的なかわりも多いですから、調査団のマネジメントなどに関与するようになりました。

そのような経過で、90年に、初めてカンボジアに行くことができました。まだ内戦が終わっていないときです。調査団は、当時の政権の文化大臣を表敬訪問するのです。大臣訪問と聞けば、立派な大臣庁舎の、大きなきれいな部屋で、丁寧にお招きいただくのだろうと想像されるかもしれませんが。しかし当時のカンボジアの国の文化省の庁舎は、2階建てのちょっと大きめの普通の家のような程度でした。電気事情も非常に悪かったので、大臣室も、かろうじて電気がついている、という感じです。それもとまどき電圧が下がって、部屋はフーンと暗くなる。大体その当時はすべての家庭に電気など行っていないで、それでもお役所は優先されている状態なのです。これが大臣室かと驚くようなところでお会いして、「調査に来ました」とあいさつをしたわけです。

大臣は、大変喜ばれて、学者の、建築や考古の先生方から紹介が進みました。私は遺跡の保存や修復は専門外ですから、終わりの方で、どちらかといえば小さくなって、「法律家です。弁護士です」とあいさつをしました。すると大臣が、ほかの専門の先生たちよりも、私の方を向かれて、「法律家が初めて私の国を訪問してくれました。ぜひお願いしたいことがある。カンボジアの文化財保護法をつくり直したい。つくりたいのだけれども、それができる人がいない。手伝ってもらえないか」と言われるのです。想像できますか、ひとつの国の法律を、初めて会った、初めて来たという外国人に、「法律をつくる手伝いをしてくれませんか」と言われるのです。日本などでは考えられませんよね。国として形ができているところでは、普通考えられないわけです。私は、自分がいきなりそういう期待をかけ

られたということから、カンボジアという国が、一体どういう状況であれば、こういう依頼が出てくるのだろうと、考えざるをませんでした。法律の仕組みができていない、それを作る人材もいない、ようは国としての制度がないも同然なのだということが、この初めての大変な状況になっているのだということが、そのときに胸の底からわかった気がしました。

3 国際政治に翻弄されたカンボジア内戦

カンボジアは、1970 年から内戦の時代が始まりました。ロン・ノル首相によるクー・デ・タで、シハヌーク国王が排斥されたのです。その後 1975 年に、クメール・ルージュがプノンペンを制圧し、「民主カンボジア」という政府を立てました。これがいわゆる「ポルポト派」で、以後 79 年までの間に、原始共産主義的な共同生活を強いる異常な政策を断行して、国民を都市部から大移動させ、既成の価値を否定し、従わない者は有無を言わず殺すという形で、大虐殺を行いました。170 万人とも言われる多くの人たちが殺されましたが、鎖国同然だったので、そのような異常な事態になっていることが、国外にはよくわからなかったのです。当然、多くのカンボジアの人たちは、難民として国外に逃れました。その後 79 年にベトナム軍の支援を受けてポルポト派が国境付近まで排除され、カンボジア人民共和国（ヘン・サムリン政権）という、ベトナムに支援をされた社会主義国ができました。私が初めてカンボジアへ行ったのは、その政権の頃でした。

この政府は当時国連に認知されておらず、議席を持っていませんでした。当時議席を持っていたのは、国から外に排除されていた当時のシアヌーク殿下、現在国王になっておられますが、このシアヌーク殿下のグループ、それからクメール人民民族解放戦線（ソンサン派）というグループ、もうひとつはポルポト派です。その三つの集

まりが、三派連合政府という政府をつくっていて、国連はそこに議席を認めていたのです。この三派連合政府というのは、カンボジアの国内は実質的には支配はしていなかったと言って良いのですが、ポルポト派は国内に拠点となる地域を持っていて、内戦状態が続いていました。このヘン・サムリン政権は、ベトナムが支援し、旧ソ連など当時の社会主義国が支援ができる体制になっていたのですが、当時の社会主義国は経済的に厳しいですから、自分の国のことで精いっぱいカンボジアの支援までは十分に手が回らない。他方で、西側と言われたアメリカ、ヨーロッパ、アセアン諸国は、三派連合政府を認め支援していますから、国土の大部分を支配しているヘン・サムリン政権には、西側からは何の援助も入らなかったのです。遺跡の保存などには、ユネスコが動くと思うでしょうが、ユネスコも国連の機関ですから動きません。このような状態で、国や国際機関からの国際的な援助もほとんどなされていませんでした。当時のカンボジアの遺跡のことに協力していたのはインド政府、それと、西側では、先ほど申し上げた上智大学の石澤先生のグループ、たったそれだけだったわけです。遺跡の他の、地雷で足を失った人への義足作りや医療活動などへの貴重な援助は、世界各国のNGOがやっていました。この頃、日本からも曹洞宗ボランティア会や日本ボランティアセンターが活動に参加しています。カンボジアは、NGO活動のデパートのような感じでした。このように、カンボジアの内戦は、それぞれ対立しているグループに、世界の国々が、大きくは西側と東側に分かれて支援するという構図ができたために、国内問題が国際問題として固定され、内戦が国際的に固定化されていたと言っても良いでしょう。

4 カンボジアの国とすばらしい遺跡群

では、カンボジアという国を地図でざらんに入れたいと思います。この黄色で囲ったところがカンボジアの国です。ベトナムの西側に

なります。面積は、北海道の約 2 倍ぐらいです。人口は、今現在 1,100 万人くらいになりました。私が行き始めた内戦の終わりごろは、約 800 万人くらいと言われました。熱帯モンスーン気候で、乾季と雨季に分かれる 2 シーズンです。民族の構成は、クメール人が 90%、あと、中国人、ベトナム人、チャム人、そのほか 30 ぐらいの山岳民族で構成されていると言われていています。山はほとんど国境あたりにしなくて、延々と平野が広がっています。

私が魅せられたアンコール・ワットというのは、この写真の寺院です。1100 年代に建てられました。南北 1.3 キロ・東西 1.5 キロの長方形の敷地の周りは約 200 メートル巾の壕がめぐらされています。これがワットの中心の、中央祠堂です。地上からの高さは 65 メートルぐらいあります。フランスのノートルダム大聖堂の高さが 69 メートルぐらいです。この写真に写っている中央祠堂は正面から撮っているために 3 つの塔に見えますけれども、中央にひとつ大きい塔があって、周りを 4 つの塔が囲んでいて、5 点の塔が配置され



アンコール・ワット

ています。蓮の花のつぼみのような形をした、美しい塔です。

ワットのすばらしさのひとつに、壁面の彫刻があります。寺院には、女性の彫刻はあまり見られないと思うのですが、このアンコールワットは、このように美しいデヴァダーという女神の彫刻が2,000体以上も壁に彫られています。ふたつとして、同じ形のものは無いと言われています。砂岩というやわらかい石が建材として使われているので彫刻がしやすく、このように繊細な浮彫を施すことができました。この写真のデヴァダーの胸のあたりはちょっと黒光りをしているのがわかりますか。これは長年にわたって、参拝するたくさんの人たちが思わず触れて、ピカピカ光ってしまったものなの

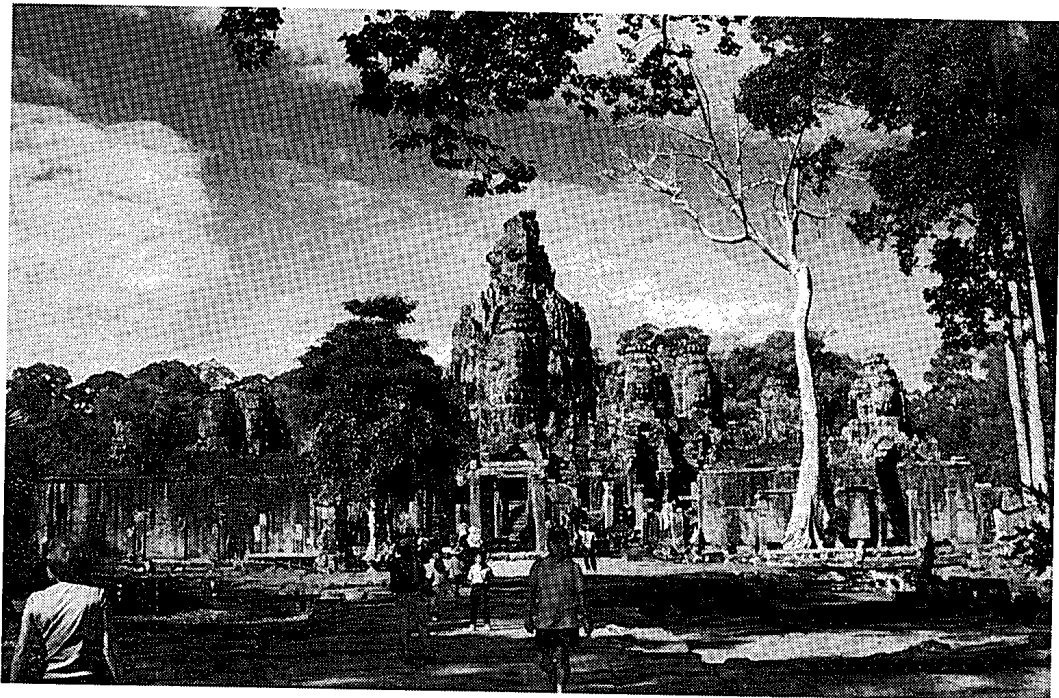


アンコール・ワット壁面のデヴァダー（女神）の浮彫

です。このように、誘われるような美しさです。

よく知られているのは、アンコール・ワットですが、実は遺跡は、そのほかにもたくさんあります。国内全体では1,600とも2,000とも言われますが、その多くが、シェム・リアップという地域に集中しています。アンコール王朝のあったこの地域に数百、主要なものだけでも62カ所もあります。

これは、バイヨンという遺跡です。観世音菩薩の顔を東西南北4方向に向けて彫った四面の塔、これを50個も組み合わせて建物の形にした、世界に類のない建築様式です。三島由紀夫という作家に「癡王のテラス」という戯曲がありますが、1965年にここを訪れた三島が、このバイヨンを建造したジャヤバルマン7世という王の伝説にヒントを得て書いたものです。この王は、クメール王朝のなかで最も繁栄した時代を築いた王ですが、癡病で亡くなったという伝説があります。その伝説と、バイヨン寺院の強い個性的な建築に触発され、この寺院がどのように造られたのかと想像の翼を羽ばたかせ、

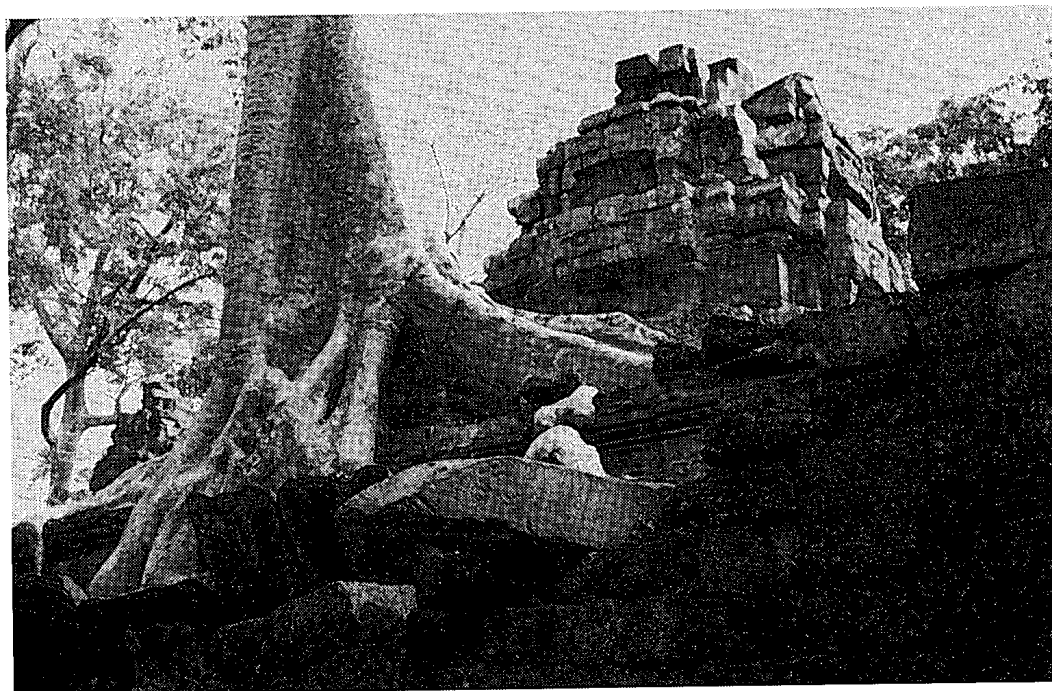


バイヨン寺院

NGOの現状（酒井）

書き上げられたようです。機会があったら読んでみてください。非常に柔和な菩薩様の顔がこのように彫られていて、寺院に登ると、たくさんの顔に見下ろされ、見つめられるような感じがします。そして、このバイヨンにも、アンコール・ワットと同じように建物の壁面に、こういう美しいデバダーが彫刻されています。この写真はバイヨンの回廊ですが、こういう壁画が寺院の周りを取り囲む長い回廊に彫刻されています。この写真の図柄は、カンボジアが、ベトナムの中部にあったチャンパという国と戦争をしたときの模様を表したもので、湖での水上戦が、生き生きと描かれています。

アンコールの遺跡が自然にむしばまれて、倒壊しそうになっているということを聞かれたことがあるかもしれません。これは、タ・プロムという寺院なのですが、この写真のように、寺院の屋根などの上に、たくさんの大きな木が根を下ろしています。これはガジュマルの一種ですが、この地域は雨が多く気温が高いので、植物の成長が早いのです。わずかな間に巨大に成長していくわけです。種が



タ・プロム寺院

遺跡の石組みの間に入り込んで根を張っていく、それを放置していると、こういうふうになってしまうわけです。もちろんアンコールワットはこんなになっているわけではありません。ふだんメンテナンスをちゃんとやって、種が芽を吹いてきたら、そのときに取りつてしまえばこういうことにはならないのですが、放置するとこうなるのです。このタブロムは、自然のままに任せていたらどうなるか、ある意味では実験的に放置してある寺院です。アンコール遺跡は長年フランスが修復をしてきた歴史があるのですが、その中で、タブロム寺院だけは自然に任せるといふ保存の方針をとりました。そのために、このような大きな木が残っているのです。でも、ここまで

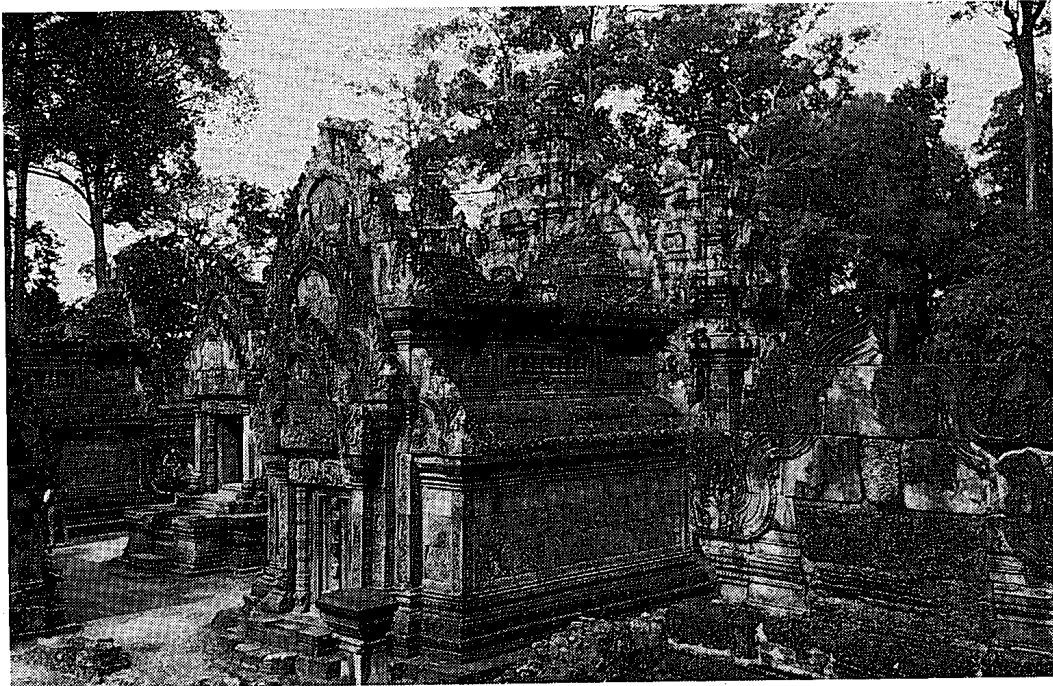


チャウサイテボーダ寺院の浮彫

大きくなりますと、これをとってしまおうと石組みの間にすき間ができて、崩れるおそれがあるため、現状では手のつけようがないという事情もあります。このタプロムは、自然の中で滅びていく遺跡のはかなさを体現していて、訪れる人に強い印象を与えています。

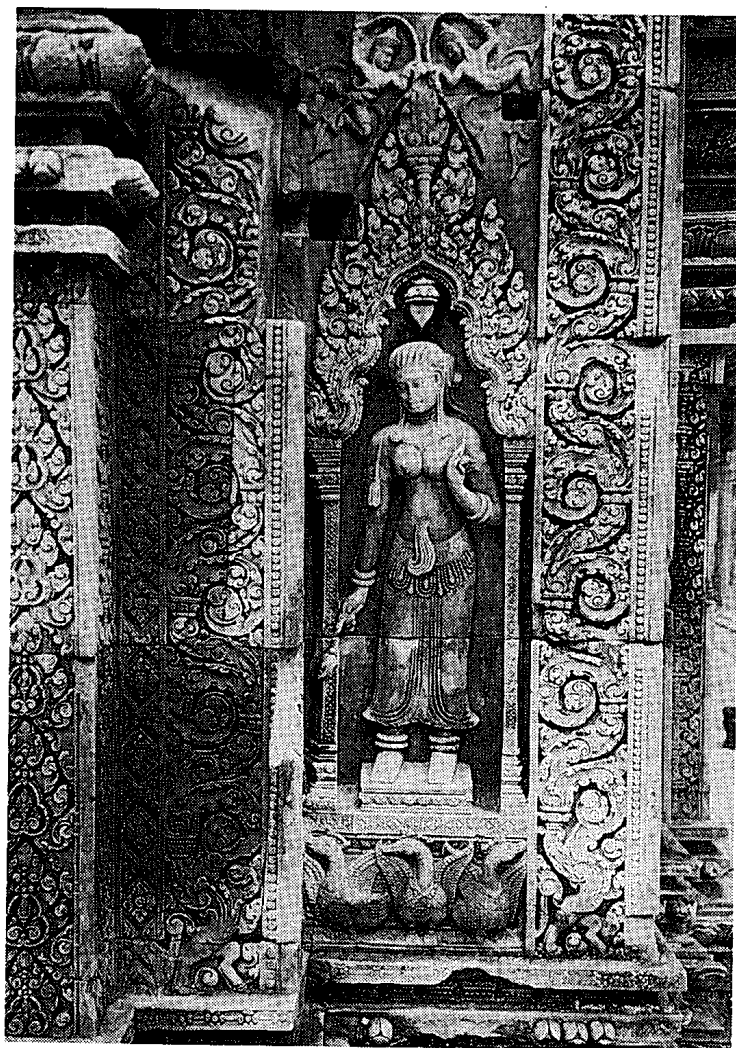
古い遺跡を、どういう保存の仕方をするかというのは、いろいろな学問的な立場があるようです。修復を始める時点の姿をとどめて、それ以上崩壊しないようにするか、建てられたときまでさかのぼって、もとの姿に戻すのかなど、いろいろな考え方あります。文化というのは、自然に対して人間が働きかけて作っていくものですが、タプロムは、その自然との絡みの中で存在するものとして、自然との共存をそのまま生かすという、そういうコンセプトでこのような保存がされていると私は理解しています。

ほかにも小さなかわいらしい寺院がたくさんありますが、これは、チャウサイテボーダという寺院です。これはこの寺院にある非常に保存状態のいいデバダーです。こういうかわいらしいのもあります。



バンテアイ・スレイ寺院

これは、バンテアイ・スレイという、「女の砦」という意味の、赤い砂岩でつくられた遺跡です。こじんまりした遺跡ですが、フランスによって修復されていて、彫刻が細密ですばらしい寺院です。この写真のデバダーは、「東洋のモナリザ」と呼ばれています。後にフランスの文化大臣になったアンドレ・マルローという作家が、若い頃にカンボジアに行って、この遺跡を訪れた時、この像の余りの美しさに感動して、自分のものにしたくて盗掘をいたしました。そのときの経過を、「王道」という小説に書いています。彼はこれを盗んでベトナムまで運び出して、ベトナムで捕まって裁判にまでかけられたということです。後に文化大臣までになった著名な作家に、盗



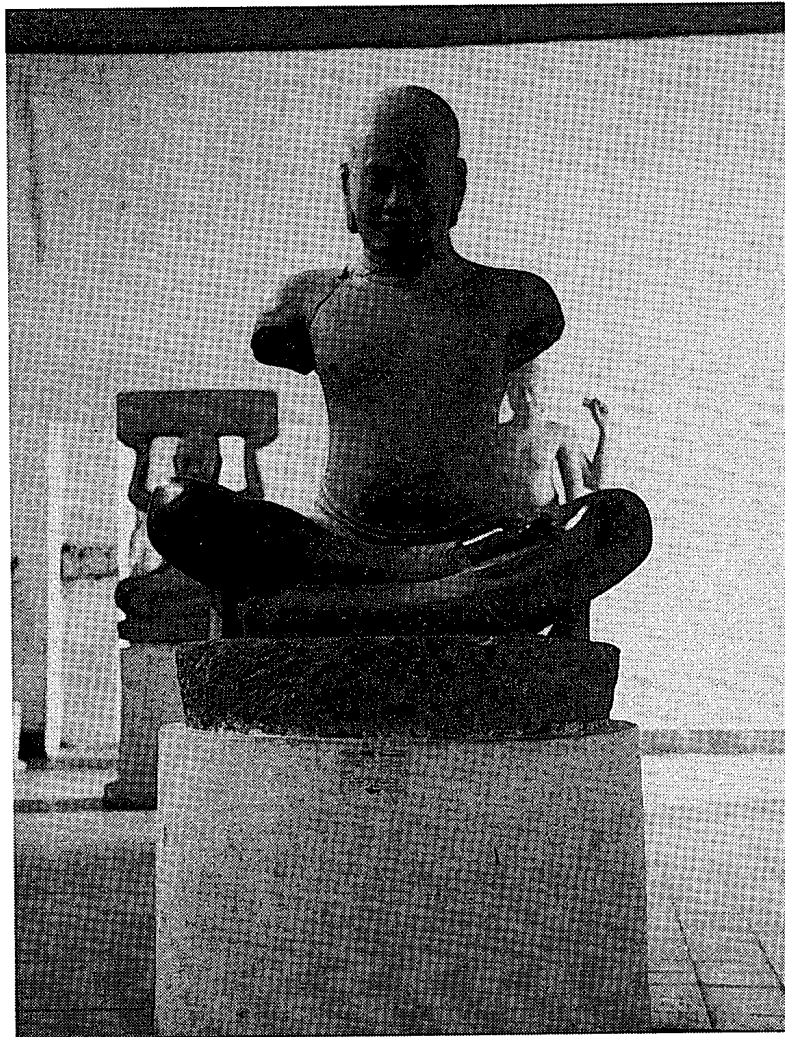
バンテアイ・スレイ寺院の浮彫「東洋のモナリザ」

NGOの現状（酒井）

掘までさせたというほどすばらしい彫像です。

カンボジアには、これらの浮彫だけでなく優れた彫像もあります。この彫像は、先ほどお話したバイヨン寺院を建てたジャヤバルマン7世の像です。仏像と違って非常にリアリティーがあり、彼の思想や人格、人間性まで感じ取れる気がします。本当にいいお顔をしていて、私は、2番目の恋人と呼んでいます。1番目の恋人はアンコール・ワットですね。

クメールの彫像は非常に大きいものもあって、この写真のものは室内におさめることができないまま遺跡保存事務所の敷地内の屋外



ジャヤバルマンⅦ世の彫像

におかれています。写真のここに、牛がいるのがわかりますか、この花の上のところに、犬のように見えるのが牛ですので、彫像の高さは大体 4 メートル、5 メートルあることがわかると思います。

これも遺跡のひとつですが、これは、海でも湖でもありませんで、「バライ」と呼ばれる貯水池なのです。一辺が 3 キロ掛ける 8 キロという、非常に大きな長方形の広大な貯水池が、今から 1000 年も前につくられています。このアンコールの王都は、水利都市と言われていて、雨の降らない乾季に備えてこういう水の管理をすることが、王国維持の条件だったのです。そういう意味でこれも文化的な施設です。

遺跡に行きますと、こうやって子供たちが土産物売りに飛んでやってきます。正確に言ったら、「来ました」と過去形で言った方がいいかもしれません。ここ 3、4 年前からは、遺跡をゆっくりと見たい観光客のために、物売りがうるさくまわりついてはいけない



遺跡で土産物売る子どもたち

ということで、遺跡の中に入ることは規制されるようになりました。今は遺跡の外でこういう光景が繰り広げられることになります。以前は、私たち調査団が考古の発掘などやっていると、子供たちはその周りで見ている、仕事の休み時間になるとそばにやってきて、Tシャツとか、それから「クロマー」というスカーフのようなカンボジアの伝統的な多様布があるのですが、そういう土産物を「買って、買って」と寄ってきます。家計の手助けになるように、親がわずかなお金を出して商品を仕入れて、それを子供たちが売りに来るわけです。そこで上がるわずかの収入が、その家庭を支える現金収入の基礎になっているというような生活をしています。

5 アイデンティティの基礎としてのアンコール遺跡

さて、では次に、カンボジアの歴史について、簡単に触れてみたいと思います。

実はカンボジアには、比較的新しい時代まで、紙に書いた自分の国の歴史の本というのがありませんでした。紙の文化を持っていなかったのです。何に記録をしているかというと、ヤシの葉を乾燥して、そこに鉄筆や竹筆で文字を書き込み、墨を刷り込んでいくという手法がありました。貝葉といいます。こういう記録の手段だったので、当然朽ち果てていきます。ですから、口承伝承、口で伝える伝承的なものはありますけれども、ちゃんとした国の歴史を書き残したのがありません。ですから、わからないことがたくさんあるので、研究対象しては大変おもしろい地域のようなようです。

西暦でいうと2世紀ごろからのことが、おぼろげながらわかっていて、インドの影響を受けた「扶南」という国が2世紀ごろに始まっています。その後「真臘」という国が南下してきて扶南を吸収し、現在のカンボジアを領域とします。いわゆるアンコール王朝時代というのは、西暦802年にジャヤバルマン2世の新王朝創立宣言によって始まります。そして1432年に、タイのアユタヤ王朝からの攻

撃によって、王都が陥落するまでの約 600 年続きました。このアンコール王朝時代に先ほどご紹介した沢山の遺跡がつくられています。

世界の歴史をひもといてみると、こんなに長く続いた王朝というのは例を見ないようです。ただ、この王朝はいわゆる世襲制ではなくて、必ずしも親が子に王位を譲るという形ではなく、王権の移動は、親戚や家臣など、色々な形で行われてきたようです。

王朝が最も栄えたのが、アンコール・ワットを建てた 1100 年代のスールヤバルマン 2 世時代、その少し後の、先ほどの彫像のジャヤバルマン 7 世時代だったのです。このジャヤバルマン 7 世時代には、インドシナ半島のほとんどをこのアンコール王朝が支配し、すばらしいアンコール文化が花開き、広くインドシナ半島の文化をリードした、そういう時代でした。

みなさんになぜこのような歴史の話をするかということ、カンボジアの人々にとって、このアンコールの文化というのは、最大の誇りであることをわかってもらいたいからなのです。始めにお話ししたように、カンボジアは最近まで、内戦で国中が荒れ、カンボジアの人たちは、自分の国で誇れるものは何もないと嘆き、自信を失っていました。私どもが調査でカンボジアに行くときには通訳をお願いします。内戦時代難民として日本に来て、日本で大学を出て仕事を得たというような人もいますし、内戦前に日本に留学し、そのまま国に帰れなくなっくなって、日本国籍を取得した人もいます。そういう人たちに、通訳や、あるいは専門分野で団員として参加してもらうという形で、調査団に加わってもらっています。彼らの中には、自分の国に住んでいたときにも、アンコール・ワットを見たことがないという人がたくさんいるのです。調査団の通訳として行ったある青年が、私と一緒に先ほどのバイヨンという遺跡を歩きながら、感激で言葉を詰まらせながら、「自分の国は今まで、いいことは何もなかった。誇れるものは何もなかった。でもここに来て、私たちの先祖はこんなにすばらしいものが造れた、こんな力があつたことがわ

かった。ようやく誇れるものを見つけることができた」と、涙を浮かべながら話していました。このアンコール遺跡が、実はカンボジアの人たちにとって、アイデンティティの基礎になっていると、この国に接して心底思います。

6 悲惨だったポルポト時代を乗り越えて

彼らに、「何も誇るものはなかった」と言わせるような苛酷な現実がどこから生まれることになったのかということをお話しておきたいと思います。

王都陥落の後には約300年、タイのアユタヤ王朝と東のヴェトナムから挟撃され、両属状態に置かれるという苦しい時代が続きます。この状態から逃れるため、1863年から、フランスの保護領となり、植民地時代が始まります。この間、フランスはカンボジアに強い影響を与えることとなります。フランスの手によって遺跡の保存活動がなされたのも、この時代以降のことです。

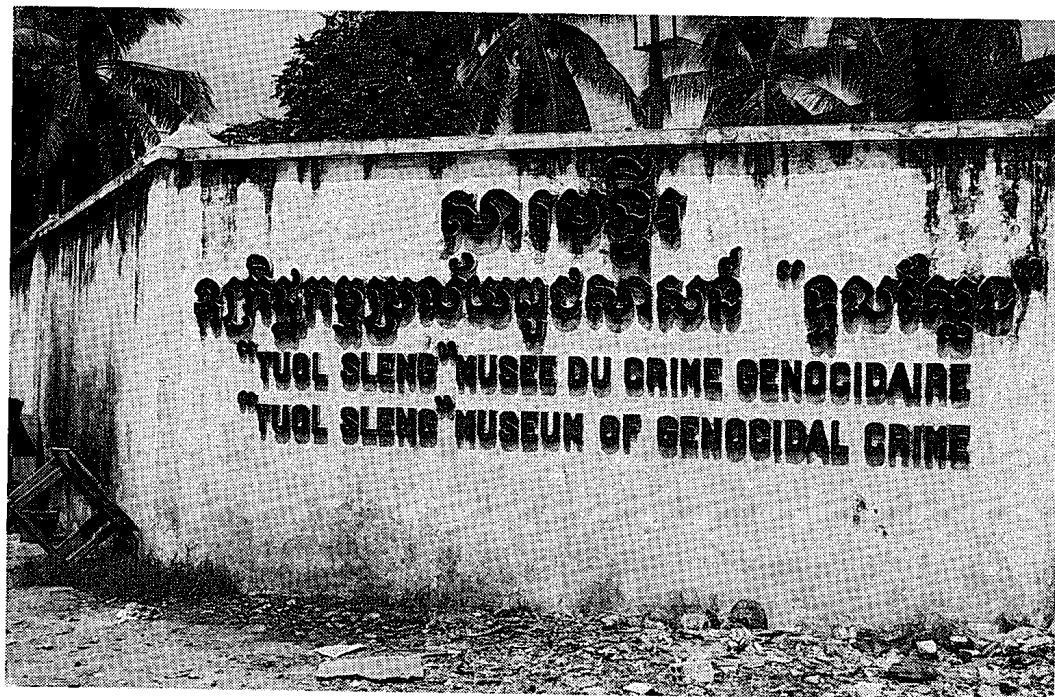
1945年頃からシハヌーク王を中心として独立宣言がなされ、その後第2次世界大戦終結の前後に、曲折はありますが1953年、カンボジア王国として完全に独立します。以後シハヌーク殿下が王政社会主義という政策をとって、実質的に支配をしていきますが、経済政策の失敗もあって、その後に内戦時代が始まるのです。1970年に右派のロンノルがクー・デタを起こし、失脚したシハヌーク派との間で内戦が始まります。しかしロンノル政権は、これを支援していたアメリカ軍がプノンペンから撤退した75年、直ちに崩壊します。その後にカンボジアを支配することになったのは、ポルポト派、「クメール・ルージュ」(赤いクメール)と呼ばれた人たちのグループです。この1975年からポルポト派が駆逐される79年までの約4年の間、カンボジアではどういうことが起きているのかということが、ほとんど世界中にわかりませんでした。

首都プノンペンに住んでいる人が、全員どこかに移動させられて

しまったらしいとか、沢山の人が殺されているらしいという話もあるけれど、そんなことは簡単に信じられない。でも、国内で生活できなくなった人たちが、難民としてどんどん国から外に出ていく。しかし実態はよくわからないというような時代が続きました。既にお話ししたように、その後 1979 年に、ヴェトナムの応援を得てポルポト派が駆逐され新しい政権ができました。現在のフンセン首相も、後に若くしてその政権の中心になります。このヘン・サムリン政権が、私たちの調査団長の石澤教授に、ぜひ遺跡のことを見に来てほしいと依頼をした政府です。ようやくその頃から、ポルポト時代に何が起こっていたのか、世界に向かって明らかにされるようになってきました。

プノンペンにツールスレンという戦争博物館があります。これは、高等学校をポルポト時代に強制収容所に使っていたところです。この写真は、ツールスレンの戦争博物館の外壁です。

これがその中の建物なのですが、何ということはない普通の校舎

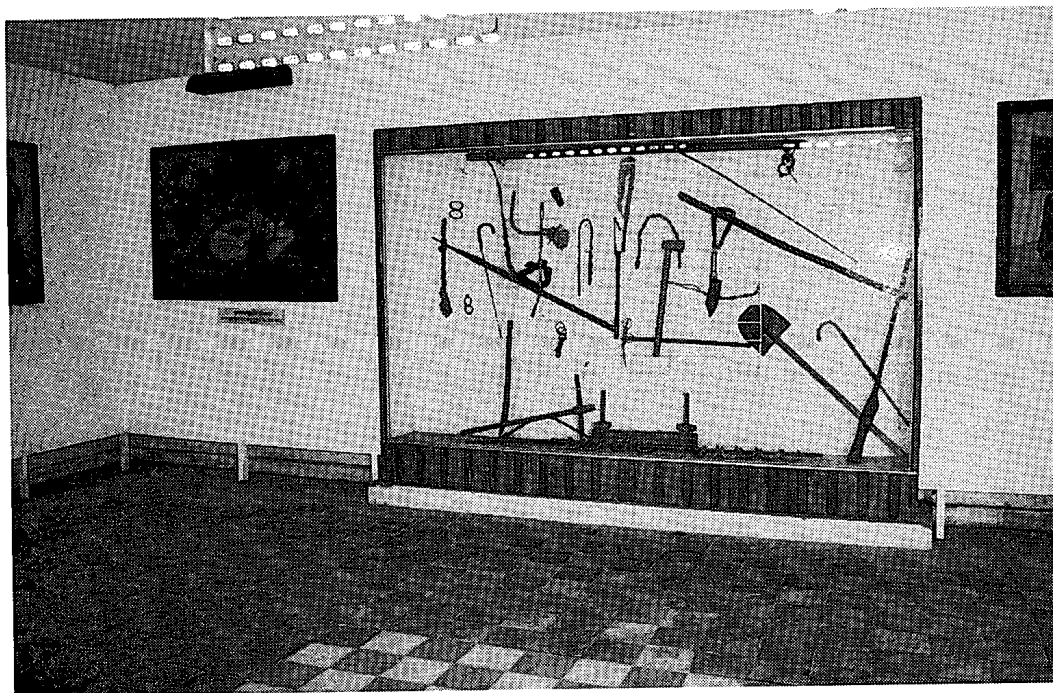


ツールスレン戦争博物館

なのです。ところが、この中の教室はどういうふうになっているかというと、このようにレンガで小部屋に仕切られています。この独房に、政治犯とか、重要な職にあった人たちが閉じ込められていました。

この写真は、当時使われていた拷問の器具で、展示されています。その横にある絵は、拷問の様子を描いたものです。この写真は、ここで殺された人たちの写真にとって記録をしたものです。そのほかにもこのように、この中に収容されていた人たちの写真が撮ってあるのです。ポルポト派というのは非常に記録が好きだったようで、まず、こうやって収容者を1人1人写真を撮ったのです。しかし、次々と殺していくものですから、生きている間に写真を撮れなかった人を、さっきのように死んだ後に写真を撮ったのだと言われていきます。そしてこれは、頭蓋骨でつくったカンボジアの地図です。

なぜこういうことがされたのか、現在、ポルポト派に属していた人たちから話を聞いたりして研究が進んでいます。ポルポト派は、



ツールスレン戦争博物館（内部）

社会・経済など全ての既成の価値を否定し、中国の文化大革命の思想や施策を持ち込んで、政治を行いました。宗教も学問もすべて否定するという立場で、極端な民族主義的共産主義により、農民と労働者を中心とした国を造ろうとしていたようです。しかし彼らが現実に行ったことは、知識階級と言われる人をみんな殺し、サハコーと呼ばれた集団農村共同体の実態は苛酷な強制労働キャンプで、栄養失調も含め沢山の人が死んでいきました。公務員・医者・学校の先生などは勿論、中学、高校に行って勉強してたという人もインテリのうちに入るわけで、例えば、フランスの教育システムが取り入れられていた国ですから、学校ではフランス語を教えたので、フランス語ができるというだけで殺されたのです。家族制度も否定して、小さい子供は親から引き離して、そして、洗脳していくわけです。今の言葉で言えばマインド・コントロールみたいなものかもしれません。親の愛情の中で子供を育てるというのではなくて、そういう彼らの非常にエキセントリックな価値観を植えつけるために、小さい子供を親から引き離してしまうのです。そして、そういう子供たちを、支配の手先として使いました。ポルポト派の虐殺は、12歳とか13歳とかいうような小さい子供たちを殺人者として使ったと言われていています。

都市部の人たちはみんな地方に強制移住させられて、もともと自分が住んでいたところからは基本的に離してしまう。そしてそこで、強制労働に従事させて、カンボジアの新しい国づくりのためだと称して、例えば農地を増やすための灌漑用の水利施設などを掘る作業を強制的にやらせました。そのような中で疲労こんぱいして死んでいく人もたくさんいましたし、栄養失調で死んでいく人たちもいました。無計画な水利施設は機能せず、農地があれて飢饉を招く結果にもなりました。また家族に対して愛情を示すような言葉を言ったり、かばうような態度をとると、それだけで殺された人も沢山いたと言います。この時代、およそ170万人の国民が虐殺されたと推定されています。

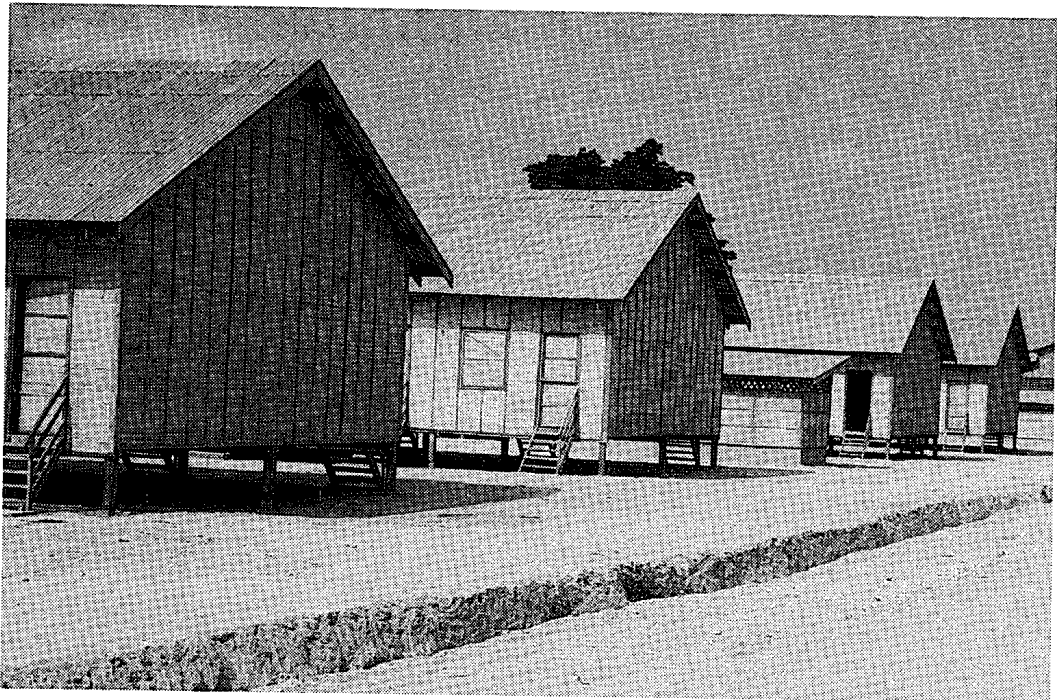
その後ベトナムに支援された新しい社会主義国家であるヘン・サムリン政権ができましたが、さきほどお話ししたように、シハヌーク殿下たちの三派連合政府が国際的に認知されていたので、国土の大半を統治しているにもかかわらず新しい政権は認知されないという中で、その後約10年、政治的な混乱が続きました。

7 ようやく実現した和平

和平へ向けての動きが具体化したのは、1987年になってからでした。和平会談は困難を極めました。89年にベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦構造が崩れていく中で、カンボジアをがんじがらめにしていた国際政治のしがらみも解けていき、1991年にパリ和平協定が成立し、内戦終結への道筋ができました。国連カンボジア暫定統治機構、通称 UNTAC という機構が作られ、対立してきた各派の武装を解除し、国外に流出していた難民を帰還させ、選挙を行って新政府を作るという大変な作業を、国連が中心になって行うことになりました。国連としても初めての試みでした。この組織の特別代表となったのが、日本人で国連で長く仕事をしてきた明石康さんでした。

つい数日前に、日本でアフガニスタンの復興のための国際会議が開かれていましたね。そのときに緒方貞子さんという女性の方が、この会議の共同議長で会議をリードされました。緒方さんは、日本で誇るべきすばらしい国際人です。実はこのカンボジアの和平が動き出した当時、緒方さんは、国連の難民高等弁務官という仕事にいたのです。そして最初に、カンボジアの37万人の難民を内戦の終わったカンボジアに帰すという仕事をされました。それ以来10年近く、難民高等弁務官の仕事をしてこられたのですが、それをやめられたのち、今回このような形でアフガンの復興に関与しておられるのです。

私がカンボジアに通い初めて3年目くらいの頃、この難民の帰還が始まりました。この写真は、国外の難民キャンプでの生活を余儀

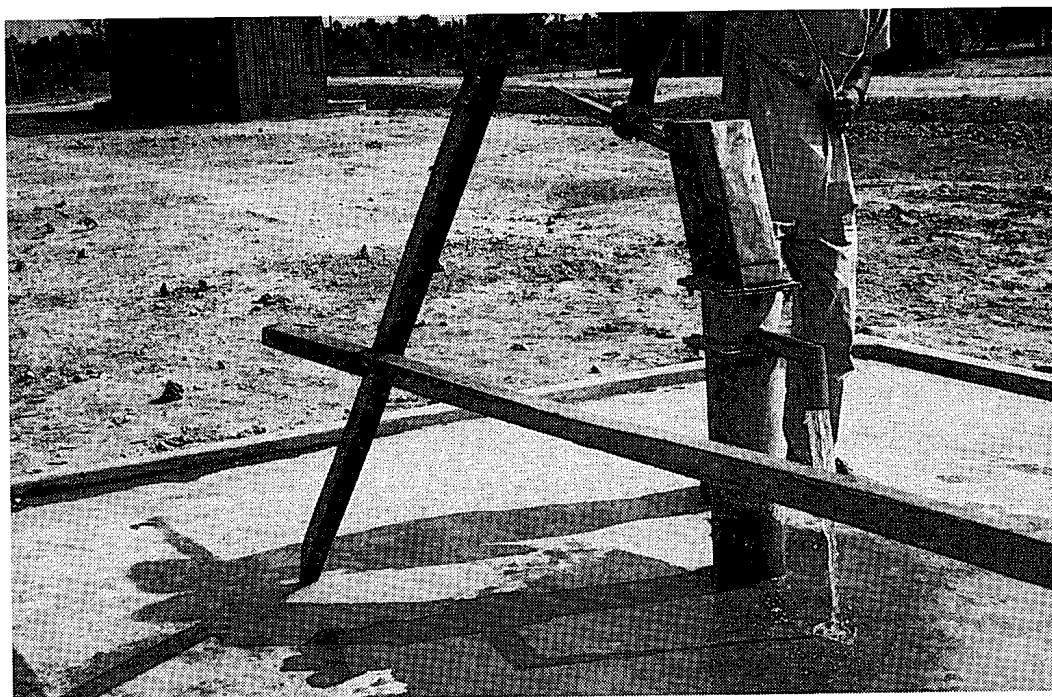


帰還難民の仮定住施設

なくされていた人たちが、帰国してそれぞれの出身地に帰るまでの間の、仮の定住施設として作られたところです。ちょうど建物が建ち上がって、もうすぐ難民が帰ってくるという時期に、私どもの調査団の社会経済班が、調査に行ったときの写真です。まだ人が入っていないので、とても閑散とした風景です。上水道などの施設は全くありませんから井戸掘りからやるわけです。この写真の井戸は、ユニセフ仕様のポンプだと聞きました。このすぐ後から、この場所に沢山の人たちがバスで運ばれ、数日をここで過ごして、国際的な援助による食料や生活資金を分配され、故郷へと帰っていきました。

先ほど、国際政治のしがらみが解けていき、和平へと向かったことをお話ししましたがそれがどういうことか、簡単に説明しておきましょう。

当時のヘン・サムリン政権というのは、ヴェトナムが援助していて、その後にはソ連がいる。他方、シハヌーク殿下は中国と関係が深い。中国は社会主義国だけれども、アメリカと共同行動をとって、



帰還難民の仮定住施設

ヴェトナムがカンボジアを侵略したとしてヴェトナムとヘン・サムリン政権を非難し、三派連合政府を支持する立場を取る。ASEAN・東南アジア諸国連合も三派連合政府を支持する。そういう入り乱れた国同士の綱の引き合いが固定化され、カンボジアという国をここまで翻弄してしまったのです。

私がカンボジアという国にかかわっていこうと考えて続けてきたのは、なぜなのだろうか、自分でも考えることがあります。あえて言えば私自身が東西対立構造に責任があるわけではありませんが、カンボジアの人たちだって同じことなのです。何の責任もない人たちが、そういう国際的な枠組みの中で、ここまで苦しめられるのか、人間としてここまで苦しめられるのかという現実を、たまたまこういう時代に生まれ合わせた人間として、見てしまったわけです。見てしまった以上、自分に何かできることはないのかということを書いて、そして、たまたまめぐり合わせた、それができる場所を大事にしてきたということかもしれません。

カンボジアという国は、内戦が続いたために貧困のどん底にありましたが、暑い国ですから、果物は豊かに実りますし、お米は、種をまいて水さえ確保できれば、放っておいても育つという条件があります。植物が生育する条件はありますから、飢え死にすることはない程度の自然の恵みはあるのです。ただ、土地は非常にやせた土地が多いですね。最初の道路づくりの話でも触れましたが、土は赤土の粘土質で、乾季にはこれがガチガチにかたくなるのです。本当に固いですよ。そういうところを、ポルポト時代には、水利施設を作ると称して、ろくな道具もないまま、水路掘りをさせられるというような労働をさせられたわけです。

それが雨季になって一端雨が降ると、ぬかるんで大変なことになってしまうのです。一度調査団もバスが大きな水たまりにはまり込んでぬかるみにタイヤをとられて、身動きできなくなったことがありました。町まで歩いて帰るとしたら2、3時間はかかる、さあどうしようなんていうことになったことがありました。四輪駆動でないと怖くて走れませんが、ランドクルーザーでも動けなくなってしまうことがあります。ただ、現在は、本格的な国際援助で、橋や道路の建設が進んでいますから、幹線道路は、ずいぶん良くなりました。

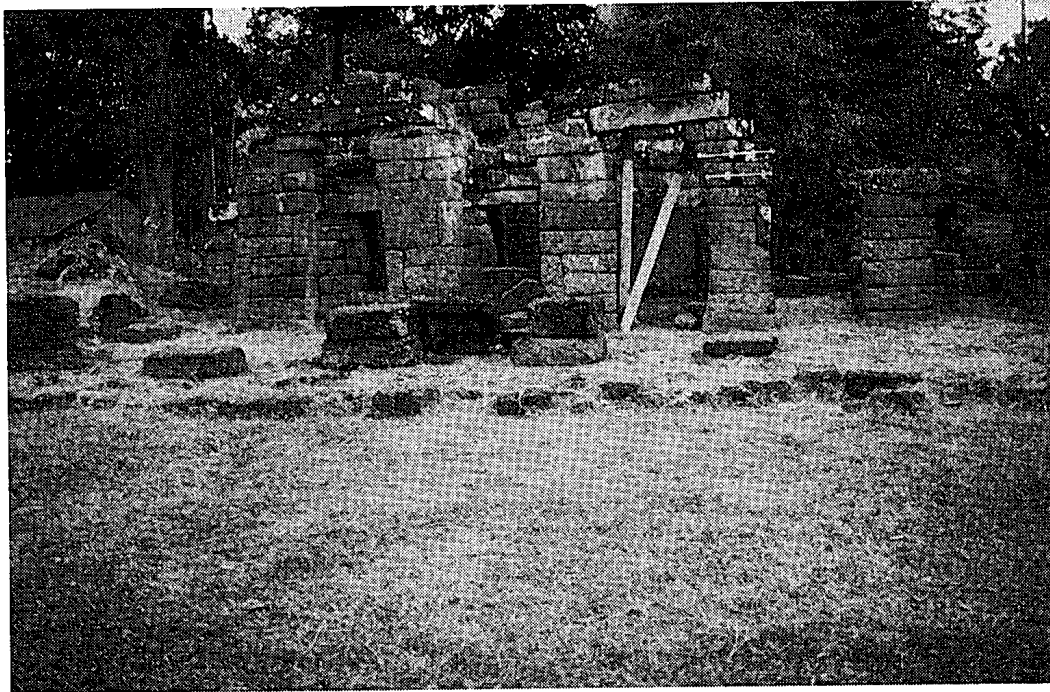
8 遺跡調査団の活動

そういう中で、調査団がどういう仕事をしているのかご紹介しておこうと思います。

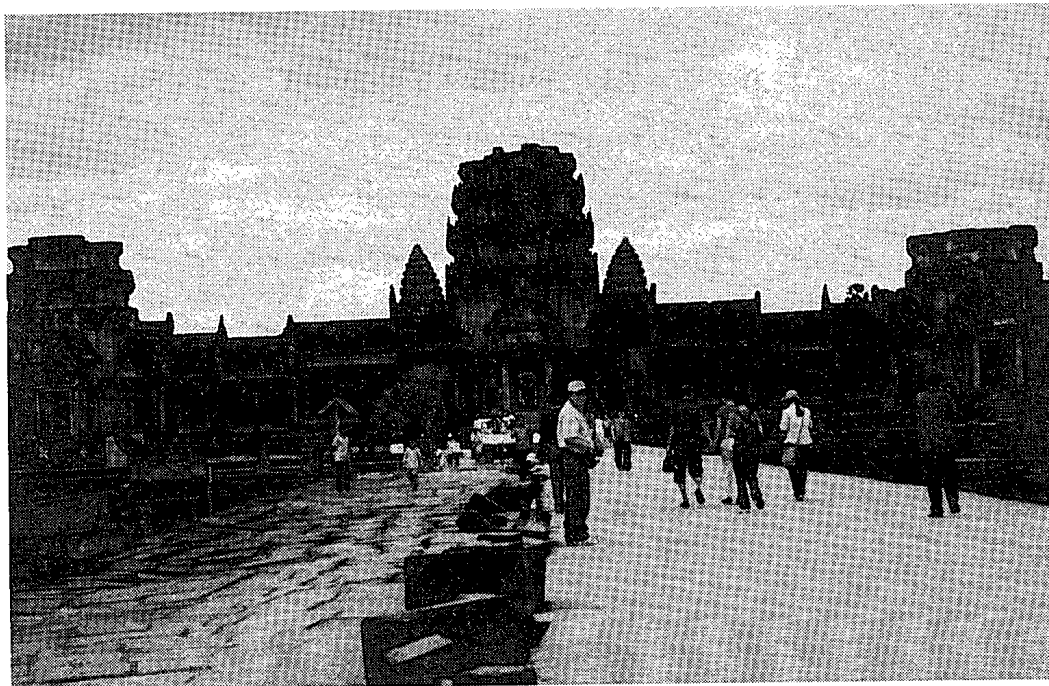
この写真はバンテアイ・クデイという遺跡で、私ども調査団がベースにしている中規模の遺跡です。この遺跡は、古い時代から何度か建てかえられ、地下には古い遺構があるのではないかとされていて、その歴史の経過を探るために、この写真手前の草原のところなどを掘り下げて、古い遺跡の跡を調べたりしています。これは、考古学の人たちがメインになっています。

NGOの現状(酒井)

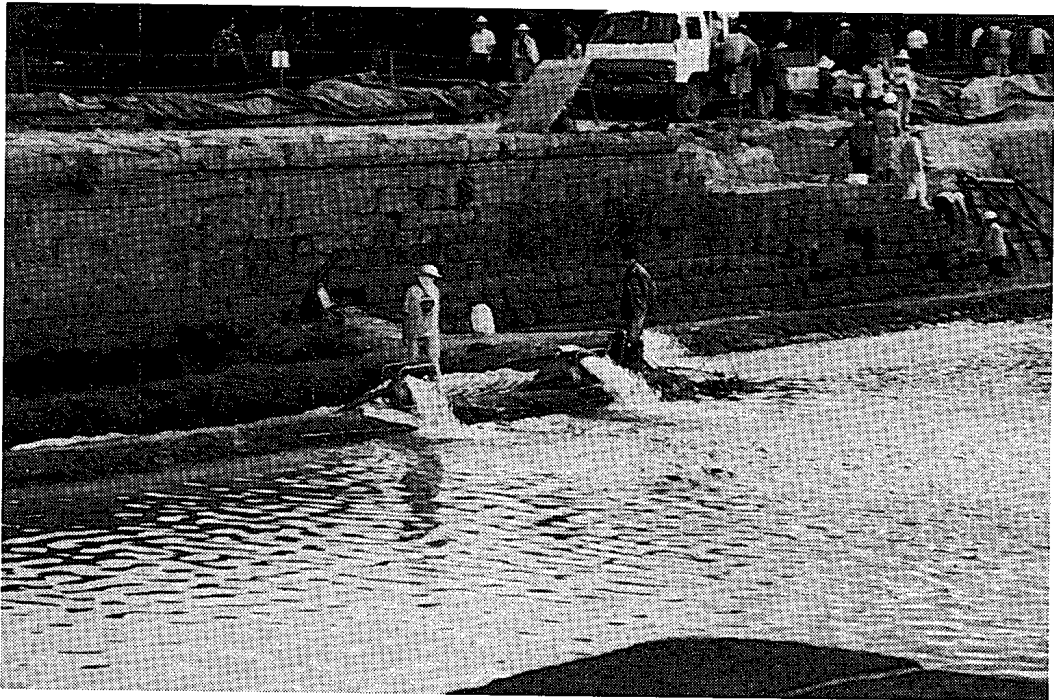
今一番大きな仕事は、先ほどお話ししたアンコール・ワットの正面参道の修復工事です。この写真がアンコール・ワットの正面の参



バンテアイ・クデイ寺院



アンコール・ワット正面参道



工事中のアンコール・ワット正面参道

道ですが、右側は割合にフラットできれいになっていて、左側はガタガタしているのがわかりますか。この右半分は、昔フランスが修復したのですが、内戦のために工事がストップして、30年ほど放置されてきました。この残りの半分を、今私どもの調査団が中心になって、現地の、カンボジアの遺跡を守っていく組織、新しくできた組織と共同で、そこを援助して修復工事をやっています。これは、濠にかかっている参道ですから、その濠を一部囲って、ポンプで排水をして、一旦石材をはがして、痛んだ石は取り外して新しいものと取り替え、そして組み直していくというような作業をするわけです。

この写真は、カンボジアの学生さんたちが、遺跡のレリーフを記録しているところです。実は、内戦時代が終わった後、遺跡の保存関係の専門家というのは、わずか3人しか生き残っていなかったのです。ですから、カンボジアの人たちが自分の力で守っていこうにも、それをできる人がいないという状態でした。ですから、私たち調査団が一貫してやっているのは、人材の養成ということなのです。大学の先生なども、みなほとんど殺されてしまったり、外国に出た

りましたから、教える人がいないという状態になったわけです。

この写真は、私がプノンペン芸術大学で文化財保護法の関係の講義をしているところですが、このように調査団は、90年代の初め頃は、遺跡の現場に調査に行く前に、プノンペンでそれぞれの学者が専門的な集中講義をいたしました。それが終わった後で、学生さんを選抜して、遺跡の現地に連れて行って、考古発掘の具体的な手法を学んでもらいました。そういう教育、指導をするということが大変大きな役割になっています。

この写真は、調査団のメンバーの他に警察官が並んでいますが、発見された焼き物の窯跡の調査に行ったときのものです。窯跡はカンボジアではそれまでみつかっていなかったもので、非常に貴重な発見でした。当時は調査に行くとき、危険なので警察官がついていてくれたのです。窯跡や焼き物を調査していくと、陶器類の歴史的な編年の研究によって、歴史の研究が進みます。そういう調査などもやっております。



バンテアイ・クデイで研修するカンボジアの学生たち

9 調査団の活動理念……途上国支援とは

次に、私たちの調査団の理念、どういうことを目指して活動しているかということをお伝えしたいと思います。お話ししたように、この国では、学者も専門家も、みんな殺されてしまって、大学の先生もいなくなってしまうました。まず、人を育てなくてはならない。カンボジアの人自身が、自分たちの手で自分たちの文化財を守ることができるようにするのが一番だろうというふうに考えているわけです。よその国の人が行って、一時期修復活動をして、その後引き上げてしまえば、遺跡はそのときからまた崩れ始めます。立場を逆にして考えてみて下さい。日本にも大事な文化財はたくさんあります。日本だって今から 50 年前ほど前には、敗戦のために国中貧しくて、文化のためにお金を出すことが困難な時代もあったわけです。そういうときに、例えば奈良の法隆寺とか、そういう日本の国宝と言われるようなところを、どこかの外国の人たちが来て、自分たちのやり方で修復して、はい、さようならと帰ってしまったら、どう思いますか。結局その国の文化は、その国の人たちが守ることができれば一番良いのです。ですから、彼らにその力をつけてもらうことが一番大事なのです。あなたたちは、お金もないし能力もないから、私たちがやってあげますよというのは、決して許されない傲慢な態度だと思うのです。

私たちの調査団は、まず第 1 に、カンボジアの自立を助けるための協力をしていくということが一番大事なこととして位置づけています。ですから、人材養成とか、それから、わずかに残った専門家や新しく専門家になろうとする人たちとの共同研究などをしてきました。大切なのは、調査の成果を現地に戻していくということです。具体的に言うと、成果をクメール語に訳して、クメール語で、現地の人たちが読めるような形で戻してあげることです。途上国で行われる日本を含めた外国からの調査については、調査に来てくれるのはいいけれども、結局、調査結果はみんな自分の国に持ち帰ってし

まって、現地には全くフィードバックしてくれないという現地からの批判を聞きます。私たちは、そういうことにならないように心がけています。その国の大事なものを私たちが調査させてもらう、一緒に研究させてもらうのですから、必ずその成果を現地に戻して、それを通じて人も育てていって、そして、将来はカンボジアの人たちが自分たちで、それができるようになることを目指しています。

第2の理念は、調査・研究と保存・修復を車の両輪のように、実際の活動もやっていくということです。調査の成果を、学問上の成果だけに終わらせないで、具体的に生かすことを目指しているのです。

3番目は、遺跡だけをきれいに修復し保存するというのではなくて、それをとりまく社会そのものの発展と結びつけた形で、社会の中に遺跡を生かしていってもらうことを目指しています。そこに住む人たちの生活を考えながら、遺跡の存在を彼らの生活の中に、カンボジアの人たちが生きることの中に組み込みながら、遺跡の問題を位置づけていくということです。具体的には、調査や修復活動を手伝ってもらうということもあります。つい先日、NHKテレビのプロジェクトXという番組で、私たちの調査団のアンコール・ワット西参道の修復工事をテーマにした番組が放映されました。見た人もいるかもしれませんが、日本から、ベテランの石工のおじいちゃんが調査団のメンバーに入ってくださって、何年にもわたって現地の石工さんを育てきました。訓練を受けた人たちが、新しい石材を削り、参道の工事に加わってもらえるほどになってきました。カンボジアでは、昔、こんなにすばらしい石造建築や彫刻をつくる技術があったのに、専門の石工さんがいなくなってしまって、その技術が伝承されてないのです。だから日本からその石工さんが行って、地元の石工さんを指導しているのです。

ほかにも、遺跡や伝統的な文化を地元の村落の生活に密着させて生かしていくような発展のさせ方を研究し、実際に村の生活の中に一体化させ、取り込んでいく手法を実践している調査団のメンバー

もいます。60 歳を過ぎた人ですが、日本の一部上場会社の人事部長までしていた方が、アンコール遺跡の魅力に惹かれ、現在は国連の UN ボランティアの立場で現地に常駐し、村落開発の実践活動をしておられます。私たちの調査団は、このように多様な形で現地と関わりを続けてきています。

10 失われた法制度

大分時間がなくなってきましたでしたが、もうひとつの、法学教育への関わりについても触れておきたいと思います。

私が上智大学の遺跡の調査団でカンボジアに行き始めた当時は、日本からカンボジアに通って何かの活動をしている人は、本当に数えるほどしかいなかったのです。和平協定成立前から活動していたのは、日本ヴォランティアセンターや、曹洞宗ボランティア会など、日本の老舗の NGO から、ごく少数の人たちが、そうですね、あの当時、カンボジア全体で十何人という程度だったのでしょうか、果敢に新しい活動に挑戦していました。世界レベルで言えば、国境なき医師団など、多くの NGO が入っていました。カンボジアは、そういう意味では、日本においても国際的にも、NGO 活動を育てた場所とすることができます。当時、日本の政府は国交がないものですから、政府関係の方がカンボジアの実情を見たいなどというときは、ビザの取得を、上智大学の石澤先生に依頼されるという、そういう時代だったのです。私はたまたまそのような場に身を置いていましたから、カンボジア政府の文化関係の仕事をしている人たちに、調査団を通じて知り合いができていました。

ところで、93 年に、国連の UNTAC、カンボジア暫定統治機構が発足した当時、日本の法律家はその活動に非常に注目したのです。皆さんも法学部だからおわかりだと思うのですが、国には「主権」というものがありますよね。その主権の一分を、国連の機構に委ねるとするのが UNTAC だったわけです。ひとつの国の主権を、国際

機関といえども委ねて良いのかということが、当時日本の法律家の間でも論争になりました。そして UNTAC の活動の実際を見て、それが本当にカンボジアのためになることなのか見てみたいという要求がわき起こりました。そのような弁護士や学者の法律家のグループによって、カンボジアの法制度調査団が組織されることになり、私が現地のオーガナイズをすることになりました。当時の司法大臣、検事総長、裁判官、プノンペン大学法律経済学部、それから UNTAC 人権部門には日本から若い弁護士が1人参加していましたから、彼を通じて UNTAC の調査もいたしました。調査の結果、遺跡の問題と同じように、法律関係も人材がほとんどいなくなっていることがわかったわけです。当時の司法関係の状況を書いたものがありますから読んでみましょう。当時の司法省の民事刑事局長が、次のように話しています。

『ポルポト時代が終わったカンボジアには、知識人がほとんどいなかった。ロンノル時代までは裁判官は200人いたが、1979年には4人しか生き残っておらず、その4人の裁判官では法案の検討まで手が回らなかった。まず、憲法を作ってから、4人の裁判官は、1人は司法省立法局へ、2人は民刑事局へ、残りの1人は大学法学部の再建へと分かれた。民刑事局へ行った裁判官は、81年から州、市の地方裁判所の再建に携わった。その2人の裁判官が、今後裁判官となるべき人を集め、(その、なるべき人というのは、ほとんどは法学教育どころか大学教育も受けたこともない人たちです)そして、3月から6カ月のトレーニングをして、各裁判所に送りだした。その後、その2人の裁判官が各州をめぐり、実務指導に当たった。その後もアドバイスを与えたりトレーニングをした。このような次第で、生き残った裁判官は、民法・民訴法の立法作業まで手が回りませんでした』 こういう話をしています。

私は、その調査の前年である92年当時、上智大学の社会経済班の調査で、アンコールの遺跡のあるシェム・リアップ州の裁判所に調査に行ったことがあるのですが、「裁判官です」と言って出てきた方

に、「どこで勉強されましたか」と聞きましたら、はっきり言われな
いのです。よく聞くと、「昔、内戦前に、裁判所で働いていたことが
あります」と、こういう答えなのです。裁判官だと言わないし、書
記官だとも言わない。要は裁判所という場所で仕事をしていました、
ということです。そうであっても、裁判所なるものを知っていれば、
裁判官になってくださいと言われるような、そういう状況だったわ
けです。

11 日本・カンボジア法律家の会の活動

93年の調査団に参加した法律家たちは、この分野でもまず人を育
てていかなければならないのだということがわかりました。そして
自分たちにできることをまずやるではないかということになりました。
そこで、「日本・カンボジア法律家の会」Japan Jurist League
for Cambodia、通称 JJJL という団体が作られました。参加者は、当初、
弁護士 5、6 人、他に法学部の学生、大学院生などが協力してくれ
て、年に 1 回程度まとめて仕事を休んで現地に行って、プノンペン
大学法律経済学部でセミナーを開いたりしてきました。この大学は、
公務員の養成が主な目的で始まったところなのですが、法律を教え
るところはそこしかなかったのです。そこで、裁判とはどういうも
のかということを理解してもらうために、模擬裁判をやったり、セ
ミナーを開いたりという活動を続けてきました。

発足当時の活動として有意義だったと思われるのは、模擬裁判の
ビデオを作って提供したことです。模擬裁判は、現地で 1 回だけ見
せるというのでは、労多くして効果は 1 回限りということになり、
もったいないですから、日本で、ある刑事事件をテーマを選んでビ
デオを作成して提供しました。女優の竹下景子さんと親しい弁護士
がこの組織の代表をしていますので、彼女にお願いしたら無料で出
演してくれまして、被告人役をやってくださいました。選んだ事件
は、深夜の駅のホームで酔っぱらいに絡まれた女の人が、相手を突

き飛ばしたら、その人が線路に落ちて死んでしまったという、これは実際にあった事件です。私の友人が弁護をしたのですが、刑法上の論点がいくつかあり、また日常的に身近に感じられる事件であったと思います。それをモデルにシナリオを作り、メンバーが裁判官役とか検事役とかをやっています。竹下景子さんはビデオでカンボジア・デビューをされたことになりましたね。その後そのビデオは、大学だけではなくて、新しくつくられた弁護士制度の中で、弁護士の養成などにも使われているようです。

今回アフガンの支援会議でも、今後の国の復興のためには、教育と共に法制度を確立していくことが非常に大事だという話が出ていました。カンボジアでは、さきほどお話ししたように、数十年の間に国の体制が色々と変わって行って、和平後の新憲法のもとでは市場解放主義をとり、社会主義国ではなくなりました。ですから、法律も新しく全部つくらなければならないわけです。法律を作り、法律家も育てなければ、民主主義の基礎がつかれないのです。

従来、日本の途上国援助は経済的な援助が主流を占めていました。典型的な援助の仕方は、たとえば現地で物を作って上げる場合、日本から人を連れて行って、日本から日本で作った材料を費用をかけて運んで行って、現地で日本から行った人が作るという形です。そうすると、日本が出したお金は、日本の会社や日本人に支払われるわけで、現地は、できたものを与えられるだけということになります。そういう援助のあり方が、批判され、反省もされてきて、変わりつつあるかと思えます。経済援助にも、常に現地への経済効果や人材育成の観点を入れていく必要があるでしょう。

そのような問題意識を持ちながら、JJLはJICAの資金でカンボジアの法律関係の方を日本に呼んで、日本で研修してもらう機会をつくるという活動も、当初行っています。このような活動を通じて、外務省やJICAに働きかけ、日本の国としてもカンボジアの法制度整備に取り組んでもらうよう要請などしてきました。現在、カンボ

ジアの民事法の整備は、JICA のプロジェクトとして日本の学者が組織され、現地に協力しながら進められています。JJL それ自体ができることはささやかなことですが、問題意識を持ってアピールすることもまた、大きな力を導き出すことになると思います。

私自身は、JJL 創立のきっかけとなった調査団を組織した直後に渡仏したので、これらの当初の活動には直接参加していませんが、96 年に日本に戻ってから、この活動に参加しています。ちょうどそのころ、ある民間の篤志家が私たちのグループに資金援助をしてくださいました。それまでは、みんな手弁当で、渡航費用も滞在費も全部自分たちで出して、仕事を休んで行っていたのですが、それに感動してくださった、当時香港でも仕事をしていた方が、500 万円相当のドルを寄附をしてくださったのです。ところがこれが、その後わずかな間に円高の時期にめぐり合わせて、ありがたいことに 800 万円ぐらいに増えてしまいました。ちなみに外国で活動する場合、資金面では為替レートが問題になります。どちらの国で資金を得て、どのようなタイミングで両替をするか、いつ実際に使うことになるかということで、大事な資金は目減りしたり、また思ったよりも増えたりすることがあります。この場合は、とても幸運でした。

このお金で何をするかということ、私たちは考えたのです。私自身は、遺跡の関係でこの国にかかわっている中で思ったのは、自分の国の言葉で学ぶことの大事さです。和平成立後、いろいろな国際協力が入って、プノンペン大学などもフランス人の先生やアメリカ人の先生が来て授業をやるようになりました。皆さん、どうですか、すべての授業を英語でやりますと言われたらどうしますか。すべての授業をフランス語でやりますと言われたらどうですか。カンボジアの学生たちは、ある水準以上の専門的な授業は外国語で受けざるを得ないのです。その専門分野の能力を問われる以前に、外国語ができなくては学問ができないのです。途上国の多くはそうだと思います。自分の国の言葉で学べるということがどんな意味

を持つのかということ、今日、少し考えてみてほしいと思うのです。

私は、法律というのは一部の専門家だけが知っていても、それだけでは意味がないと思っています。すべての法律をすべての国民が知る必要はないですけれども、法律というのは、大まかなところこんなものだとか、これは守らなければならないことだとか、こんな場合は裁判にして正しい決着をつけるのだとか、私たちはそういう常識みたいなものを持っていますよね。いつ、どこで学んだかあまり自覚はしていませんが、義務教育などの基礎教育を通じて、大体みんなそういうことをわかっているわけです。それがあって、初めて法治国家というものが成り立っていくと思うのです。結局、法律を学んだ人たちが、その国の言葉で法律を理解して、それをその国の言葉で、直接・間接に国中の人に知らせていく役目を負っていかないと、本当の意味での法治国家にならないと思うのです。

そこで私が考えたのは、クメール語の法律の教科書をつくるということだったのです。実はカンボジアにはクメール語の法律の専門書は、1冊もありませんでした。日本の法律書の中から、現地でもっとも必要とされるタイプのものを探し出しました。選んだ本は、京都大学や大阪市立大学で教鞭をとられた刑法の大家、中山研一先生の「刑法入門」という本です。これは、刑法というものの基本的な考え方を、とてもよくわかりやすく書いてある本で、単に日本の法律の紹介にとどまらず、基本理念を理解しやすいものでした。これをクメール語に翻訳したものが、この本です。

実は翻訳が大変な作業でした。言葉というものは、それが使われる地域の文化を反映するものです。カンボジアには、もともと十分な法律体系がありませんでしたから、成熟した法律用語がそもそも少ないのです。みなさんも法律を学ぶときに、まず法律用語の「定義」を勉強されたと思いますが、言葉そのものが存在しないものを訳すには、その内容、意味するところを説明していかないと、理解してもらえないわけです。加えて、日本の法律用語がわかるカンボ

ジアの人はあまりいません。結局、上智大学の方の遺跡の調査団のメンバーで、専門は工学博士なのですが、非常に巾広いインテリジェンスを持ったカンボジア人の仲間に翻訳を頼んで、この本をつくりました。

その後引き続いて、民法の本を出すことになり、慶応義塾大学の池田真朗先生が書かれた「民法への招待」という本を2分冊にして、近く2冊目ができ上がります。これらに向こうの大学の法律経済学部の学生さん、それから裁判官、検察官、そのほか法律関係者への無料配布を、ここ3年ほど続けています。先ほどの貴重な寄附のほか、国際交流基金アジアセンターというところからの助成ももらって、このような事業が実現されています。活動内容も、中山先生を始め学者の方々の参加が増え、学者による短期集中講義や、現地の教授たちと教育方法や大学の運営などに関して意見交換をする等、活動内容も少し変化してきています。

このように、実際にその国のためになるのはどんなことかということ、必死で考えながら活動してきたのが、この10年の歩みだったのではないかという気がします。そういうことを考える機会を与えてもらったということが、私は非常にありがたかったと思っています。

皆さんにとっては、多分、今のアフガンあたりが、外国の、途上国の問題を考えるきっかけになるのかもしれませんが。ひとつの取っかかりを持つと、いろいろな形で見えてくるものがあります。そしてそれが、皆さんの人生にも影響を与えるようなことが、あるいはあるかもしれません。そういう意味で、広い視野を持って、今という大事な時間を過ごしていただきたいと思います。

○司会 どうも酒井さん、ありがとうございました。

カンボジアにかかわる活動の中で、歴史、宗教、文化、政治、法

NGO の現状 (酒井)

律など、いろいろなお話が聞けたと思います。法学を勉強するとい
いますか、憲法のみならず法学を勉強する私たちにとって、何をし
たらいいのか、今、私たちは何をしているのかということを考える
上でも貴重なお話だったと思います。

どうもありがとうございました。もう一度謝意を表したいと思
います。(拍手)